

國學院大學學術情報リポジトリ

出張報告「研究事業「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の展開：明治期の国学・神道関係人物を中心に」による史料調査」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000523

出張報告

「研究事業『『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の展開—明治期の国学・神道関係人物を中心に—」による史料調査」

2017年度の研究事業「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の展開—明治期の国学・神道関係人物を中心に—」の一環として、平成30年2月22日（木）から23日（金）にかけて、愛知県名古屋市にある名古屋大学附属中央図書館において調査を行った。調査に参加したのは、齋藤公太（日本文化研究所助教）、鈴木聡子（同客員研究員）、間芝志保（同研究補助員）の3名である。

調査の対象としたのは同図書館が所蔵する神宮皇學館文庫である。同文庫は戦前の官立大学であった神宮皇學館大學の旧蔵書に由来する。神宮皇學館の図書館は伊勢神宮の神宮文庫の一部を含む特殊な大学図書館として、神道・国学研究上の重要な意義を持つものであった。戦後の1946年に皇學館大學は廃学となるが、名古屋大学の要望により、その旧蔵書が名古屋大学附属中央図書館に収められることになったのである（『名古屋大学蔵書目録 古書の部第1集 神宮皇學館文庫』名古屋大学附属図書館、1962年）。

このような経緯を持つ神宮皇學館文庫は、神道・国学にまつわる膨大な資料を収蔵しているが、明治期の神道・国学に関する史料も含まれている。今回の出張は、神宮皇學館文庫所蔵の幕末～明治期の史料の収蔵状況を調査し、特に国学・神道関係人物にまつわる史料の調査を主眼としたものであった。

調査の行程に関しては、まず2月22日は神宮皇學館文庫に含まれている明治期の史料全体の状況と、各史料の概要を、ノートを取りつつ把握することが中心となった。同23日は、マイクロフィルム化されている史料を印刷

し、また前日の概要把握により、研究事業との関連において重要な意味を持つと判明した史料に関してはさらに詳細な調査を行い、ノートを作成した。マイクロフィルム化されていない一部の史料に関しては撮影依頼を申請した。

以下、調査した史料のうち特筆すべきものを紹介したい。

・『幽顕考証』（172/Ma/神皇）

写本1冊。明治30年杉本幸生写。伊勢の国学者・前野包廣の著作である。過去に日本文化研究所では、岩瀬文庫に所蔵されている同じ包廣の『幽顕論 上下合巻』の調査を行っている（『國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所年報』第1号、15頁）。この『幽顕考証』は『幽顕論』と内容が通底しているが、別の著作であり、包廣が「幽顕」の二元的構造による世界の成り立ちに強い関心を寄せていたことがうかがえる。

本史料は記紀などの古典の記述に基づき、「幽」と「顕」の二元的構造の形成過程を明らかにしようとしたものである。とりわけ天孫降臨の際に「顕」と「幽」の境界が確定し、以後生身を伴ったままでの相互の出入が不可能になったと説いている点などに、『幽顕論』と通ずる包廣の思想の特徴が見られる。

・『増補神事式』（176.2/H/神皇）

自筆本1冊。明治3年序。橘守部の門下であった近藤真瑤の神事に関する著作である。序文には、神事は『神事略式』によって行すべきとしつつも、大略のみの同書では諸々の

神事を行うのに不十分であるため、同書の規則を基として増補を行ったとある。

橘守部は本居宣長を批判し、独自の説を唱えたことで知られるが、真瑤は師・守部の『稜威道別』のみならず、本居宣長の『大祓詞後釈』や『古事記伝』、平田篤胤の『玉櫛』や『一宮記』を参照しており、本史料の末尾には篤胤『毎朝神拝詞』の「拝祖先祖霊屋詞」が引用されている。ここからは明治初年の時期に守部門人が置かれていた学問状況をうかがい知ることができる。

・『大祓詞譯解』（176.4/To/神皇）

自筆本1冊。明治6年跋。出雲大社の社家に生まれ、本居内遠と千家俊信に学んだ国学者、富永芳久による大祓詞の注釈書である。本史料は他機関に所蔵がないようであり、芳久の学問について研究する上で有益な史料であろう。

・『皇太神宮諸神事祝詞』（176.4/Ko/神皇）

自筆本1冊。明治5年時の神宮における祝詞文を収めた史料である。本書の祝詞文からは、明治6年に新暦に改暦する直前の神宮における神事の様子がうかがえ、改暦後に廃絶する節日行事や、9月22日に行われていた天長祭（新暦以降は11月3日）が見える。また、各神事の祝詞文に赤字で修正がなされた形跡が見られる点が特徴としてあげられる。

本史料には、明治期に神宮司庁祭典課長などを勤めた藺田守宣や神宮の機関である「祭典調課」の名が見られ、この祝詞文を通して、この人物・機関を中心に幕末から明治への変革期における神宮の神事に関する変遷を見ることができる。

・『大宮司家先祖祭行事次第』（175.7/Ta/神皇）

写本1冊。慶應4年写。慶応年間における大宮司家の祖先祭に関する史料である。仏教的な要素を含む次第や思想を改めて除くこと

などが記されており、当時の神宮内の思想を確認することができる。

・『修祓儀式』（176.4/A/神皇）

卷子本1軸。近世期の神宮における祓に関する詳細な次第がみられる史料である。

・『神葬祭祀 全』（176.9/Si/神皇）

刊本1冊。神宮皇學館文庫と岩瀬文庫にのみ所蔵が確認されている史料である。神葬祭に関する当時の著名な書物8冊の内容を執筆者なりの観点から整理しており、記載内容から明治11年以降の執筆と推定される。明治10年代頃における神葬祭の議論や実践について考察するうえで有意義な史料と考えられる。

以上の調査により、神宮皇學館文庫には明治期の国学・神道関係人物に関わる貴重な史料も少なからず収蔵されていることが明らかになった。今回調査・蒐集された史料は、明治期の国学・神道関係人物に関する信頼するデータを収集するという本研究事業の目標を遂行する上で有益なものとなるだろう。

（齋藤公太）